

第9回クラシックを楽しむ会

2014年4月27日(日) 18:30~21:30

歌劇「ホフマン物語」(オッフェンバック)

会場等：メトロポリタン歌劇場 2009年12月19日
アメリカ、ニューヨーク、リンカーン・センター

楽団等：メトロポリタン歌劇場管弦楽団、同合唱団

指揮：ジェームズ・レバイン

演出：バートレット・シャー (2008年トニー賞受賞)

出演：ジョセフ・カレーハ (ホフマン：詩人)

キャスリーン・キム (オランピア：自動人形)

アンナ・ネトレプコ (アントニア：病身の歌手、
ステラ：歌劇場歌姫)

エカテリーナ・グバノバ (ジュリエッタ：ヴェネツィアの高級娼婦)

アラン・ヘルド (リンドルフ：顧問官でホフマンの恋敵、コッペリウス：人形師、
ダペルトウット：悪魔、ミラクル博士：悪魔の化身)

ケイト・リンジー (ミューズ：ホフマンが夢に見る、ニクラウス：ホフマンの親友)



Kassie Kim as Olympia in Act 1 of Offenbach's Les Contes d'Hoffmann.
Photo: Ken Howard/Metropolitan Opera

第1幕、キャスリーン・キム演じるオランピア

ジョセフ・カレーハ

アラン・ヘルド

ケイト・リンジー

キャスリーン・キム

アンナ・ネトレプコ

エカテリーナ・グバノバ



ホフマン



四人の悪役



ミューズ、
ニクラウス



オランピア



ステラ、
アントニア



ジュリエッタ

詩人ホフマンが酒場で飲んで酔っぱらい、過去の3つの失恋(オランピア、アントニア、ジュリエッタ)を回想していく・・・。

有名な「舟歌」は第3幕開幕でニクラウスとジュリエッタの二重唱として歌われる。

「天国と地獄」などで一世を風靡したオペレッタ作曲家オッフェンバックの唯一の正式な歌劇。1881年、パリのオペラ・コミック座で初演し、大成功を収めた。

この歌劇はいまやブーム。日本でも昨年の東京二期会公演と新国立劇場公演、今年も7月にオーチャードホールで大野和士がフランス国立リヨン歌劇場を率いて凱旋公演する(S ¥39,000)。

第10回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「トゥーランドット」(プッチーニ)

5月25日(日) 18時開場、18時30分上映開始

1998年、北京・紫禁城での歴史的な公演のDVD。フィレンツェ五月祭歌劇場、ズービン・メータ指揮。中国が誇るチャン・イーモウが演出。どうぞお楽しみに

6月以降、ネトレプコの「椿姫」、メルビッシュ音楽祭の「ウィーン堅気」等を予定。

本公演について

笠羽晴夫氏（オペラ愛好家音楽評論家ではない）の個人的な感想を編集した。

演出、衣装、合唱など

最初と最後が酒場で、この演出、衣装、動きがいい。そして合唱の力が要求されるけれども、これはさすがメトで、「クラインザック」という歌？ などなかなかである。

※演出のバートレット・シャーは 2008 年にリメイク版ミュージカル「南太平洋」でトニー賞を受賞している。

詩人ホフマン役: ジョセフ・カレーハ

メトのホフマンではドミンゴが定番らしい。幕間のインタビューでもそのことが出てきてカレーハは恐れ多いといていたけれど、でもこういう悩める詩人であれば、むしろ今回のカレーハの方がこっちも感情移入できるかもしれない。出ずっぱりであるけれど、終わりまで聴かせる。

自動人形オランピア役: キャスリーン・キム

3人の女性の一番目機械人形のオランピアは、ほとんどファルセットで続く長い歌唱であるが、キムはすごい。この役、夜の女王、ツェルビネッタ（ナクソス）どころではない。近くナクソスに出る予定というのも頷ける。

※キムは韓国系アメリカ人。ファルセットとは特に高い声を出すために作り出す声色その発声技術を指す。「仮声」とも訳される。・・・裏声？

病身の歌手アントニア役、花形歌手ステラ役: アンナ・ネトレプコ

2人目の歌手アントニアとホフマンの理想ステラのネトレプコはもちろん期待通りだが、彼女が言うとおりの出番は意外に短い。

※ネトレプコは 2005 年の「椿姫」で世界的に有名になった。（6月楽しむ会で予定）

娼婦ジュリエッタ役: エカテリーナ・グバノバ

3人目の娼婦ジュリエッタ、この人が登場する場面で流れるのが有名な「ホフマンの舟歌」。役のグバノヴァはまずまず。

※グバノバは昨年 12 月楽しむ会の「魔笛」で、三人の侍女の第 2 の侍女役で出演していた。

四人の悪役: アラン・ヘルド

悪役 4 人を演ずるアラン・ヘルドはうまいし、もうけ役。

女神ミューズ役、親友ニクラウス役: ケイト・リンジー

ここでファンになってしまったのはメゾ・ソプラノのケイト・リンジーで、最初はホフマンを好きなミューズであるが、その後の遍歴場面ではニクラウスというホフマンの親友（男）に姿を変え、最後にまたミューズにもどり、詩人ホフマンの再生を手助けする。この人もほとんど出ずっぱりである。ちょっと涼しい顔のきれいな人、これはもうこれから注目していきたいズボン役の佳人である。

指揮者ジェームズ・レバイン

さてジェームズ・レバインの指揮、腰と背中の治療でこのところ長く不在で、放送で見る機会も減ってきたが、これはその前、こういう作品、やはり彼が振るとちがう。リラックスして楽しめるというか、..

そういえば、最近メトのオーケストラコンサートに復帰したという情報がある。いずれオペラのピットにも入るのだろうか。そこまでは無理だとしても、若手の指導とか、もう少し続けてほしいものである。

あらすじ

MIYUさんの「～オペラ「ホフマン物語」と3つの短編～」を編集した。

【プロローグ】ニュルンベルクのルーテルの酒場、隣は歌姫ステラが出演中の歌劇場

天才詩人ホフマンはかつての恋人の歌姫ステラが歌劇場に出演しているのを見て衝撃を受ける。今なお魅力的なステラに心は平静ではいられないが、ステラは人の心を奪っては引き裂いてしまう女性。

ホフマンの不幸が大好きな悪魔の顧問官リンドルフはステラに横恋慕。また芸術の女神ミューズはホフマンを愛し詩人として大成させようとする。

気まぐれで浮気なステラはホフマンとよりを戻そうと手紙を書いた。リンドルフはステラの召使を買収してその手紙を横取りした。

一方ホフマンを愛するミューズは、今夜こそホフマンに自分かステラかどちらかを選ばせようと思い、親友ニクラウスに変身してホフマンに付き添う。

そんな事とは露知らないホフマンはルーテル酒場に現れ、酒の力を借りて憂さを晴らそうとしたが、かえってステラへの思いがあふれ出てしまった。そしてついには自ら進んで自分の過去の恋の物語…1人の女(ステラ)の中に宿る3人の女性との恋物語…をリンドルフやニクラウスの前で学生たちに語り始めた。

【第1幕 自動人形オランピア】スパランツァーニ教授宅の応接間、ローマまたはパリ

一人めの女性はオランピア。スパランツァーニ教授宅の窓辺で彼女を見て一目惚れしたホフマンは彼女がみんなにお披露目されるパーティーに駆けつけた。そこで晴雨計売りのコッペリウスに「見たいものなら何でも見える」眼鏡を売りつけられ、それを通してますますオランピアに惚れ込んでしまった。

オランピアは何を言っても「はい、はい。」としか言わないのだが、ホフマンは自分のすべてを受け入れてくれていると思ひ込み有頂天。

しかしオランピアはスパランツァーニ教授とコッペリウスが共同制作した自動人形。二人の金銭トラブルから、怒り狂ったコッペリウスはオランピアをバラバラに壊してしまった。

【第2幕 病身の歌手アントニア】ミュンヘンのクレスペルの家の一室

二人めはアントニア。亡き母から美声と才能を受け継いだアントニアは、恐ろしい胸の病をも受け継いでいた。これ以上歌うと死んでしまうと思った父親のクレスペルは、アントニアに歌う事を禁じ、詩人で音楽家の恋人ホフマンを遠ざけるために引越しをした。しかしホフマンは新しい住居を探し出し、アントニアに会いにやって来た。

ホフマンの訪れと共に歌への思いがよみがえったアントニアだったが、病気を知ったホフマンもまた彼女に歌う事を禁じてしまった。

愛する父親や恋人のためにこれからは決して歌は歌うまいと決心したアントニアの前に、母親を死に導いた医者ミラクルが現れて、アントニアに歌うように命じた。アントニアが抵抗すると、ミラクルは母親の肖像画から亡霊を呼び出し、母親の亡霊はアントニアに歌いなさいと命じた。ついにアントニアは歌いだしてしまい、倒れてそのまま息絶えてしまった。

【第3幕 高級娼婦ジュリエッタ】ヴェネツィアの大運河に面したの豪華な邸宅

3人目はジュリエッタ。高級娼婦であるジュリエッタは大金持ちのシュレミールをパトロンにして華やかなサロンを開いていた。ジュリエッタは美しいが恐ろしい女で、彼女に夢中になった男から影を奪い取り、その影と引き換えに悪魔ダペルトウットから宝石を手に入れ、その宝石でますます男を惹きつけて魅力を増して行くのだった。

そうとは知らないホフマンはジュリエッタのサロンを訪れた。ダペルトウットは次なる獲物はホフマンだとし、彼の鏡像(鏡に映る姿)をとってこいとジュリエッタをけしかけた。

ジュリエッタはさっそくホフマンを誘惑し、ホフマンはたちまち彼女の魅力に囚われてしまった。そしてねだられるままに鏡像を与えてしまい、そればかりか、ジュリエッタにうまくけしかけられて、決闘で恋敵シュレミールを殺してしまった。

ホフマンはこれでやっとならぬとジュリエッタは自分のものと思ったが、ジュリエッタは嘲りの笑いを残し、ダペルトウットのゴンドラで愛人と共に去って行った。

【エピローグ】再びルーテルの酒場

こうしてホフマンは失恋話をすべて語り終えたが、その頃にはすっかり泥酔していた。そこへステラが現れたが、ホフマンは焦点の合わない目でステラを見て、「あなたが誰だか思い出せない。オランピア？…壊れた…アントニア？…死んだ…ジュリエッタ？…地獄に落ちた…とステラにはわけのわからないことを言い始めた。

そんなホフマンの態度に立場を失ったステラは表情を凍りつかせたが、すかさずリンドルフが救いの手を差し伸べた。それを見たホフマンは言った。…あなたがもしステラなら、僕はあなたには似合わない。ステラにお似合いなのは金も権力もある悪魔のような男なんだ…。ステラはリンドルフの腕を借りて去って行った。

そこへ（ニクラウスから）元の姿に戻ったミューズが現れ、生身の男である事はやめ、詩人として甦れ、とホフマンを祝福した。「恋によって人は賢くなる、強くなる」という合唱を聞きながら、ホフマンは詩人として甦り、一人立ち尽くすのだった。

歌劇「ホフマン」誕生の経緯

原作者 E.T.A ホフマン(1776-1822)について

エルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマンはドイツの法律家で芸術の多彩な分野で才能を発揮した。文学面でも後期ロマン派を代表する幻想文学の奇才として、フランス、ロシア等海外の文学に大きな影響を与えた。

ホフマンの作品をもとに、歌劇やバレエ作品等が多く生まれた。オッフェンバックの「ホフマン物語」以外にも、ワーグナーの「タンホイザー」、リッテルの「ニュルンベルクのマイスタージンガー」および「さまよえるオランダ人」、チャイコフスキーの「くるみ割り人形」、ドリーブの「コッペリア」、シューマンのピアノ曲集「クライスレリアーナ」などが有名である。



ホフマン（ドイツ切手 1972）

オッフェンバック(1819-1880)

ジャック・オッフェンバックはドイツ生まれでフランスで活躍（後に帰化）した作曲家、チェリスト。オペレッタの原型を作ったともいわれ、音楽と喜劇との融合を果たした作曲家である。彼によってオペレッタは黄金時代を迎え、その後スッペやヨハン・シュトラウスに受け継がれ、さらに現代のミュージカルにも影響を与えている。



オッフェンバック（西アフリカベナン切手 1980）

台本と初演

オッフェンバックの晩年はオペレッタが急速に人気を失い、よりシリアスで芸術性の高い作品を書こうとした。

フランスの劇作家・台本作者のジュール・バルビエ（1825-1901）とミシェル・カレ（1821-1872）が、E.T.A.ホフマンの3つの小説、「大晦日の夜の冒険」、「砂男」と「クレスペル顧問官」を翻案して戯曲「ホフマン物語」を書いた。この戯曲を基にバルビエが同名の台本を作成した。

オッフェンバックは病に苦しんでいて経済的な理由でオペレッタを書き続けたために歌劇「ホフマン物語」は未完のまま死去した。このため、友人の作曲家ギローがオーケストレーションなどを完成させた。このため歌劇「ホフマン物語」には多くの版がある。なお、名曲「ホフマンの舟歌」はオッフェンバックの唯一のドイツ語オペレッタ「ラインの妖精」から流用したものである。

1881年2月10日にパリのオペラ＝コミック座で初演され大成功を収めその年に101回続演された。



ジュリエッタの死（初演のポスターから 1881）